

小網代の森と干潟を守る会 小網代 森と干潟つうしん



森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ
小網代の森と干潟を守る会
〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5
代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com
TEL.046-889-0067 (仲澤)
URL: http://www.koajiro-higata.com
年会費: 一般会員 ¥1000 賛助会員 ¥5000 (入会金不要 7月~6月)
郵便振替: 00260-4-21569 小網代の森と干潟を守る会

第 117 回自然観察&クリーン

野鳥観察“カワウと公害”

10月12日(土)



異常ともいえる暑い夏も過ぎ、風も心地よい季節になり、夏の間北国や高原で子育てをしていた鳥たちが暖かい南の国への移動途中でちょっと小網代の森に立ち寄ったり、小網代の森で冬を越すために帰ってくる季節です。

そんな鳥たちとの出会いを求めての探鳥ですが、あいにくの潮まわりで干潟の鳥が期待できず、木々にはまだ沢山の葉っぱが残り鳥たちの姿を遮っており多くは期待できません。また、藤ヶ崎の斜面の木々は主にカワウと思われる鳥の糞によって真っ白になってきており、樹木の衰弱・枯死また景観の悪化を心配する声を聴くようになってきました。そのため、野鳥観察に「カワウと公害」をテーマとして加え、「カワウの“生態”や“人とのかかわり”」について学習しました。

京浜急行三崎口駅から北尾根を通過して大蔵緑地に着き、荷物を降ろして小網代湾を眺めると、藤ヶ崎から1羽の大きな鳥がスーと小網代湾の上に滑り出るように飛び出した。翼が大きくて下面全体に白っぽい。ミサゴです。小網代湾の上をゆっくり旋回しながら上昇し、そして小網代湾と藤ヶ崎の上を旋回して藤ヶ崎の向こうに消えました。

ミサゴはワシ・タカの仲間で、空から水中の魚を探し、見つけると空中に停止(ホバリング)してから狙いを定めて一直線に急降下して魚をその足で捕まえます。小網代湾にも時々姿を見せ、藤ヶ崎の木に止まっていることもあります。探鳥会でこのようにゆっくりとその雄姿を見られることはあまりなく、ラッキーでした。

皆でミサゴの飛翔を楽しんだのち、「カワウと公害」をテーマに資料を使って“カワウとウミウの識別ポイントや生態、一時絶滅危惧種に相当するほどの激減の後今日のような増加となっていること、人とのかかわり”などについて学びました。藤ヶ崎の木々の中にカワウの姿を探しましたが今日は見つかりませんでした。

その後、大蔵緑地を出発。アシとアイアシの違い、ハクセンシオマネキやアシハラガニを観察しながら石橋へ。弁慶橋では、周りの木々を伐採して光が届くようにしたので、川床の環境が良くなってカワニナが増えたことなどを確認して昼食。キイロスズメバチが目につき、体の周りにまとわりついてくる。フリーズで刺されることは無いが、気持ちの良いものではありません。鉄板道まで行ってUターン。



あまり多くの野鳥は観察できませんでしたが、鳥だけでなく生き物全般について参加者みんなで教えあいながらの有意義な自然観察会でした。

＊見聞きした生き物＊

野鳥：ミサゴ、トビ、コサギ、タヒバリ、アオサギ、モズ、セグロカモメ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、スズメ、カワラヒワ、カワセミ

昆虫：ウラギンシジミ、ウスバキトンボ、ギンヤンマ、ナツアカネ、ミヤマアカネ、キイロスズメバチ

蟹：アシハラガニ、クロベンケイガニ、アカテガニ、ハクセンシオマネキ

植物：カントウヨメナ、ノコンギク、ヌカキビ、ヤブミョウガ、ホトトギス、ゲンノショウコ



菌類：サンコタケ、シロモジホコリ

(文:別府史朗、写真:松下景太)

※ 観察会は NPO 法人小網代野外活動調整会議と共催で実施し、アカテガニ広場や倉庫を使わせていただきました。

ご参加の皆様からのメッセージ

今日はありがとうございました
小網代の森に来たのは10年以上ぶりで、久々の散策とともに楽しませていただきました。
今後もぜひ活動に関わらせていただければ嬉しいです。

中村

今日はありがとうございました。初めての参加でしたが、とても楽しかったです。
色々勉強になりました。人数が多かったので、少しバラけてしまいましたが、そこを全員で説明が聞けたらなと思いました。

君嶋

初めて参加させて戴きましたが地元でも解らぬ事が多い。これからも楽しみにしています。

中野

豊かな小網代の森は個々のヒューマンパワーだけでなく、地方公共団体の協力が不可欠なことが分かり、大変有意義な機会になりました。

片山

小網代の森へ行くことで自然の豊かさ、生物の多様性を感じられました。
特に3種類のカニが見れてよかったです。

佐久間

随想 小網代でんてん ⑨

トノサマバッタの孤独相

須田漢一

大蔵緑地から、帽子に乗ったまま引越してきたトノサマバッタを庭に放す。

カヤツリグサやオヒシバ、メヒシバ、イノコズチ、カタバミなどが勝手に生えている、ほつたらかしの草むらである。バッタは淋しそうにこちらを見ていたが、ゆつくりと草の間に隠れていった。

この日、小網代の森の定例作業を始めてすぐに、激しい雷雨になった。やがて雨は止み無事に作業を終えて帰り仕度をしていると、インターンの女性が「これ」と手渡してくれたのがトノサマバッタだった。体長40ミリほどの少し緑がかつた雌のバッタは目が可愛く、短い触角はやさしい。バッタは手の平から、腕を伝わり帽子の上に乗って動かない。北の尾根から三崎口駅に着いても逃げない。逃げるチャンスはいくらでもあったのになぜか。①急な雨に打たれて体が冷えた、②産卵の時期だった、③成虫で3か月という寿命がきた。なにとあれこれ想ったが、わからない。

バッタといえば、パールバックの『大地』を思い出す。嵐の襲来のようにやってきた渡りバッタの大集団が、またたく間に農作物を食い尽くして去る飛蝗のシーンである。この、大発生して群れ飛ぶバッタを、かつては別の種だと考えられていたが、ロシアのウバロフ博士によつて、トノサマバッタと同じ種という説が定説化した。

同じトノサマバッタなのに形や生理、生態が異なるのは、成長時に多数の個体が押し合いへし合いの過密状態に置かれているからだ、という。ぎゆう詰め状態に置かれたトノサマバッタの体つきはストレスでやせ、黒く変色し、凶暴な性質になる。やがて成虫するにしたがい翅は普通よりも強くなり、より高く、より遠くへと群をなして移動する。そのような型を群生相(移動型)と呼び、草の豊かな所でのんびり育ち、群れない型を孤独相、その中間にあたるものを転移相という。

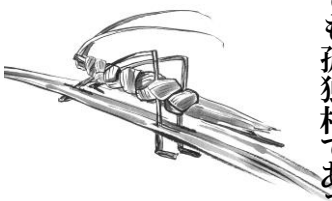
ところが、各地に散らばって生息していた孤独相のバッタも、より環境のよい所を求めて移動を繰り返し食草の豊かな場所に集まり出し、その近くに産卵する。数多く産み落とされた卵から孵化した幼虫は、お互いに触れ合うことが多く、

その刺激で群生相の性質を持ち始めるものたちが成虫になると、集まって産卵する。その結果さらに大きな幼虫の集団がつくられ、ますます集合性が高まっていく。このように、孤独相→転移相→群生相と循環し、ある日とつぜん、食草を求めて大移動をはじめ、農作物や山林に多大な被害を与える。

「氏より育ち」という。同じ種でありながら置かれた環境によつて、性格や行動が異なってしまうのは他の生き物にもいえる。捨て猫など、育ったところが忘れられず、初めのうちは人を慕ってくるが、相手にされないのみずから食物を漁るようになり、目は鋭く警戒心が強く、動作も敏捷になる。

トノサマバッタは庭のどこかに卵を生むかも知れないが、生まれてくる幼虫のために、まわりの草は残しておこう。それが、ひととき心を癒してくれたトノサマバッタへの御礼であるし、成虫になっても孤独相であることを願うからでもある。

(2012, 9/16 観察)



干潟の雑学 (9)

ウミニナの背中に乗ったツボミガイ

小網代の干潟に暮らしている巻貝ではホソウミニナ(*Batillaria cumingii*(Crosse,1862))が一番数多く見られます。イギリス海岸前50センチ×50センチ四方に千匹くらい、最近では数が減って少し心配されているウミニナ(*Batillaria multiformis*(Lischke,1869))も小網代では増えてきています。これらのウミニナ類をよく見るとかなりの割合で殻上にツボミガイが乗っています。小網代干潟のウミニナ類にはツボミガイが多く見られるのか日本近海産貝類図鑑などにも小網代のツボミガイの写真がヒメコザラ(ツボミガイ型)として使われています。

イギリス海岸前の干潟のホソウミニナ、ウミニナには季節や場所によっても異なりますが、1パーセントから15パーセントくらいの割合でツボミガイが殻上に乗っています。さらにツボミガイはウミニナ類の生貝の殻上だけではなくユビナガホンヤドカリなどが利用しているウミニナ類の殻上にも乗っています。普通は大きなウミニナ類には大きなツボミガイが乗っていますが、小さなウミニナ類に大きなツボミガイが乗っていることもあります。ツボミガイが乗っている一番小さなウミニナ類の殻径は2ミリ(殻長は5ミリ)ですので、小さなホソウミニナには小さなツボミガイが乗っているようです。ツボミガイの殻長は最大で6ミリくらい、小網代干潟のホソウミニナの殻径は大きくても7ミリから8ミリくらいですから(殻長は16ミリから24ミリ)、ホソウミニナの殻上では巨大に見えます。ツボミガイはウノアシ(*Patelloida sacharina from lanx* (Reeve,1855))、コウダカアオガイ(*Nipponacmea concinna* (Lischke,1870))などと同じユキノカサガイ科(Lottiidae)であり、ヒメコザラ(殻の表面に網目状の細かい模様)、シボリガイ(殻の表面に放射状に黒い筋)、ツボミガイ、シボリガイモドキ(*Patelloida signatoides* Kuroda & Habe,1971)の4種は非常に近い関係です。これまで笠貝類の分類では明確に別種とする根拠が見つからなかったのでヒメコザラ、シボリガイ、ツボミガイの3種は同種であると考えられており、ヒメコザラ[*Patelloida pygmaea form heroldi* (Dunker,1861)]をヒメコザラ(ヒメコザラ型)、シボリガイ[*Patelloida pygmaea*(Dunker,1860)]をヒメコザラ(シボリガイ型)、ツボミガイ[*Patelloida pygmaea form conulus*(Dunker,1861)]をヒメコザラ(ツボミ型)と整理されていました。



ホソウミニナの殻上で巨大に見えるツボミガイ



ヤドカリが利用するホソウミニナ殻上のツボミガイ





小さな眼を持つツボミガイ

ヒメコザラは岩礁帯で普通に見られ、シボリガイは内湾のマガキの上に生息し、ツボミガイはウミナ類の殻上に生息します。2004年度の日本貝類学会においてミトコンドリアを用いた分子系統解析によって3種は別種とするのが妥当であると発表されました。また2007年にはシボリガイとツボミガイについて遺伝的解析と生態学的解析が行われ、現在では別種とされています。そして特に生態学的な研究ではツボミガイの学名を *Patelloida lampanicola* (Habe,1944)と記載している論文が多いようです。

これら3種の笠貝は岩礁や貝殻上に生育する藻類を食べるベジタリアンです。シボリガイはカキ殻上に生育する藻類だけを食べ、ツボミガイはウミナ類の殻上とカキ殻上の両方に生育する藻類を食べていることが報告されています。そしてツボミガイは体の成長とともに殻口の面積を増大させないために殻を上方向に成長させることでウミナ類の殻上に乗りやすく適応していることも報告されています。ツボミガイはウミナ類の殻に乗ってそこに生息する特別な藻類を食べるために長い時間



カキ殻上のシボリガイ

間をかけてその形態を変化させてきました。ツボミガイはウミナ類、藻類という2種類の生き物と互いに結びついて干潟で暮らしていますが、そしておそらく干潟で暮らす他の何種類もの生き物とも深く関わって暮らしているものと思われます。ツボミガイは以前には日本の多くの干潟で見られたようですが、近年はウミナ類が多く生息する干潟でもツボミガイが見られなくなっているようです。(ツボミガイは環境省の準絶滅危惧種に指定されています)ウミナ類が棲めてもウミナ類の貝殻に藻類が棲めないような干潟が多くなって

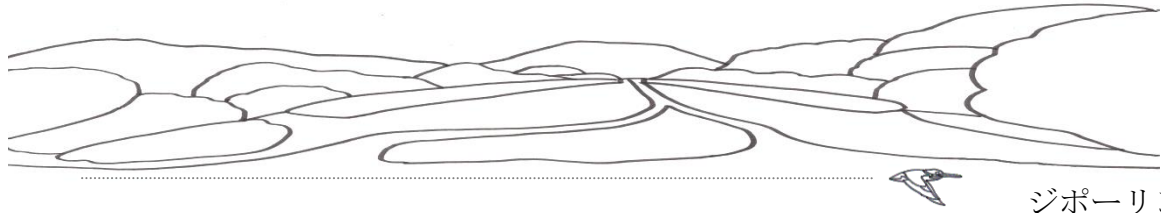
きているのかもしれませんが。小網代の森そして干潟に暮らす生き物がみんなつながっていることをツボミガイは改めて教えてくれているようです。

小倉 雅實

参考資料： 日本近海産貝類図鑑、奥谷喬司 編著、東海大学出版会、2000年
佐々木猛智先生(東京大学)の研究、中井静子先生(東北大学)の研究
中野智之先生(名古屋大学)の研究、金谷 弦先生(国立環境研究所)の研究
ブレイン モルトン先生(ホンコン大学)の研究



宝石が飛んでくる穏やかな冬の干潟



ジポーリン菜穂子

そうです。「飛ぶ宝石」といえば、カワセミ。その美しさゆえ、バードウォッチングの愉しみに目覚めるので、バードウォッチャーの間では「きっかけ鳥」とも言われているそうです。漢字はあの宝石の「翡翠」が当てられています。宝石のひすいのように美しいからではなく、もともとは、古代中国で翡翠というのは、鳥のカワセミのことだったのです。カワセミ（翡翠）の羽のように美しいので、あの碧い石を翡翠と呼ぶようになったそうですよ。ですから、歴史的には、宝石が飛んでくる、というよりむしろ「石にされた美鳥」ですね。

江戸時代の博物学者、小野蘭山の著した『本草綱目啓蒙』にも、カワセミ（翡翠）の羽のようなので、あの碧翠の宝石の名前となったと説明されています。本家の『本草綱目』（李時珍 編）には、「翡が赤い鳥で雄。翠が青い鳥で雌。雌雄あわせて翡翠。」とあります。『漢書』にもその記述があるそうです。おもしろい。しかし、カワセミのメスの嘴の下の方は朱いものの、オスもメスも、ともにお腹側が橙、背中が青碧、ですよ。古代中国では、二色ひと組と考え、そして「天にあっては比翼の鳥、地にあっては連理の枝のように」のノリで、ひと組をオスとメスにしてしまったのか。仲の良いことをござります。もしかしたら、二羽で仲良くしているとき、オスが羽根を広げていて、赤い色が目立ち、その下で縮こまるようにしているメスは、背中の青が目立ったのか……。はてさて……。



比翼の鳥に連理の枝、といえ唐の玄宗皇帝と楊貴妃のロマンスのこと。楊貴妃は世界三大美女のひとり。玄宗皇帝からそれは、こよなく愛されました。楊貴妃との愛のためには、自らの国が傾こうがおかまいなし。そこで、古代中国では「傾国」というと絶世の美女のことなのです。この言葉は江戸の日本でも使われます。海を隔てると、美女は美女でも、遊女のことを傾国とか、傾城とか。位の高い遊女は、絹の布団を何枚も何枚も重ねていたそうですね。楊貴妃の夜具もすごいですよ。カワセミの羽の縫い取りのあるものだったそうなのです。白楽天として知られる白居易の「長恨歌」に歌われています。楊貴妃は、眠そうに起きてくる姿が、海棠にたとえられたり。艶やかな様子は牡丹。そして、花は花でも、言葉が話せる花、解語の花なのだそうです。それ以来、花といえば、女性のことなのですね。

世界三大美女、あとのふたりは、クレオパトラ。それから、小野小町。古来、日本では、女性の艶やかな髪を褒めますね。みどりの黒髪ってね。小野小町の髪も褒められていたのだそう。「翡翠だちて」いる髪状だ、と。カワセミの羽根のように、きらやかに艶めいた髪の美女だったので。能の「卒都婆小町」では、美貌におごり高ぶった若い頃の自分のことを昔語り。

翡翠のかんざしは婀娜と嫋やかにして揚柳の風に靡くが如し

と謡います。「大原御幸」のシテ（主人公）の建礼門院も、若かりし頃は同じように翡翠のおかんざしの持ち主でした。『平家物語』にその記述があります。しかし、建礼門院は、その御髪をおろして出家なさいます。せつかくのカワセミの羽毛のような髪を・・・、と思うと哀しみも増しますね。『源氏物語』では、薫の宮の思い人である宇治の大君の髪も、カワセミ。この頃は、殿方が、姫君を「見る」ことから、恋が始まったのですね。

髪、さはらかなるはどに落ちたるなるべし、末すこし細りて、色なりとかいふめる、翡翠だちていとをかしげに、糸をよりかけたるやうなり。

第四十六帖「権本」

カワセミのような艶やかなさらさら髪に、薫の宮の恋心も増していくのですね。

さて、ギリシャ神話にも、比翼の鳥や連理の枝のように仲の良いご夫婦がいます。風の王女ハルキオーネと、明の明星の息子ケーユクスです。しかし、航海に出たケーユクスの船は難破。そのことを夢で知ったハルキオーネは海岸に。そこには打ち上げられて、変わり果てた夫が。悲しむハルキオーネを見てかわいそうに思ったゼウスはふたりを二羽のハルシオン（Halcyon）にかえたのです。ハルシオンというのは、カワセミのこと。カワセミとなったふたりは仲睦まじく暮らしました。それからというもの、カワセミが卵を孵す冬の七日間、ハルキオーネの父、風の神アイオロスは、海が荒れないように風を閉じ込めてあげるのです。ですから、ハルシオン、つまり、カワセミは、海の波を収め、穏やかにしてくれる鳥であると、信じられているような。あるいは、平和を運ぶ鳥とも。ハルシオン・デイズ（ハルシオンの日々）というと、冬至をはさんだ冬の穏やかな日々のこと。小春日和のように、冬なのに暖かい日、という意味にもなります。また、過去の輝かしい日々、という意味でも、使われるようになりました。さらに最近では、ハルシオンは睡眠導入剤の名前だそうですね。

カワセミのハルシオンとなったハルキオーネを登場人物にして、歌劇にしたのが、フランスの作曲家マラン・マレー（Marin Marais）。歌劇「アルシオーヌ」です。フランス語ですから、「h」を発音しないのですね。江戸の宝暦の頃です。松尾芭蕉が『奥の細道』や『笈の小文』などを刊行。近松門左衛門が『曾根崎心中』竹本座で初演した頃に作られた作品です。あまり馴染みのない作曲家ではあります。

荒海を穏やかにする、風が吹かない、という伝説をもとにして考えると、カワセミを冠した飛行機というのは、いいかもしれませぬ。飛行機が揺れなさそうで。カワセミは、キングフィッシャー（kingfisher）とも呼ばれます。正しくは、common kingfisher です。キングフィッシャーという飛行機が実際にありましたよ。インドの航空会社でしたが、残念なことに、今は経営困難に陥ってしまったそう。残念。

キングフィッシャーという名前は文字どおり、魚をつかまえるのが上手だからですね。漁師王カワセミ、というわけです。一直線に海面に飛んでいって、つかまえてきますね。

翡翠の掬めし水の みだれのみ 中村 汀女

インドの飛行機のカワセミは見られなくなりましたが、日本では、新幹線がカワセミです。山陽新幹線の500系。車体がカワセミそっくり。元JR西日本技術開発室長&試験実施部長の仲津英治さんによると、早さと安全性を追求するとカワセミの嘴のようになったのだとか。「芸術は自然を模倣」（アリストテレス）しますが、「技術も自然を模倣」するのだそうです。

インドでは、カワセミ、飛行機だけではなく。ビールの名前がカワセミです。キングフィッシャー・ビールです。日本のインド料理店でも見かけますね。で、カワセミもいるし、飲もう飲もうというのは、古代中国の詩人たち。たとえば、松尾芭蕉も大好きだった唐の詩人、杜甫。カワセミのことを絶句にしています。「曲江二首其一」。杜甫が官職を得た頃の作です。

一片花飛減卻春	一片花飛びて 春を減卻す
風飄萬點正愁人	風は萬點を飄へして 正に人を愁へしむ
且看欲盡花經眼	且つ看る 盡さんと欲するの花 眼に經るを
莫厭傷多酒入唇	厭ふ莫かれ 傷ふこと多き酒 唇に入るを
江上小堂巢翡翠	江上の小堂 翡翠巢くひ
花邊高塚臥麒麟	花邊の高塚 麒麟臥す
細推物理須行樂	細かに物理を推すに 須らく行樂すべし
何用浮名絆此身	何ぞ用るん 浮名の此の身を絆(ほだ)すを



「ひとひらの花びらでも、飛んでくると、春の終りが始まったかと思う。風が吹いてたくさん花が舞えば、もういよいよ終りか。だが、まあ、散っていく花を見ていよっか。飲み過ぎはよくないって言われてるけど、ま、いいじゃあないの。川っぺりには、カワセミがいるし。きっと伝説の動物もその奥で寝そべっているんだよ。世界の根本原理を考えたら、ひとときひとときを楽しまなくっちゃ、ということに尽きる。この世限りの虚偽の名前なんかどうでもいいさ。」

たしかに、川べりの花満開にカワセミ。これが飲まずにいられますかってね。この七言絶句、「其一」ですから、「其二」もあります。その中の

人生七十古来稀 人生 七十 古来稀なり

という一文は、おなじみですね。当時、70歳まで生きているのは、とっても稀だったんですね。それで、「古稀（希）」。人生一回きりなんだから、この景色を楽しむために、借金してでも、飲もうではないか、という句です。

杜甫の見たこの景色は、きっとこんな感じ。ハルシオンは、冬に活躍しますが、俳句では、カワセミは夏の季語です。

花ぐもり 松に翡翠の 瑠璃うごく 水原 秋桜子

それから、次の句、「御庭池」を「小網代湾」に替えてみましょっか。字余りですけど。

御庭池 川せみ去つて 鷺さぎ来る 正岡 子規



まさしく。

参考にした本とサイト：

唐沢孝一『都市の鳥類図鑑』（1997 中公文庫）

山科鳥類研究所『おもしろくてためになる鳥の雑学事典』（2004 日本実業出版社）

紀宮清子さまの記事も。

Charlie Hamilton James, Kingfisher: Tales from the Halcyon River (2009, Evans Mitchell Books)

奥本大三郎『虫の宇宙誌』（1984 集英社文庫）

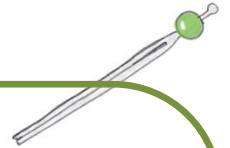
オウィディウス『変身物語（下）』中村善也訳、（1984 岩波文庫）

仲津 英治「技術は自然に学ぶ：カワセミと新幹線」<http://www.birdfan.net/fun/etc/shinkansen/>

小倉さんのディープな干潟愛コーナー

今回は「飛ぶ宝石」カワセミの話ですね。カワセミは瑠璃色が美しいという印象がありますが、宝石の翡翠は緑色とっていました。干潟にも「海の宝石」といわれるウミウシの仲間が暮らしています。その中でもコノハミドリガイは翡翠と同じ緑色で黒とオレンジ色に縁どられ、緑色の体には黒と白の細点が散在していてとても綺麗なウミウシです。

コノハミドリガイはゴクラクミドリガイ科です。ゴクラクミドリガイ科はElysiidaeといえます。ラテン語でElysiumは理想郷だそうです。干潟に暮らす生き物たちにとって小網代の干潟はいつまでも理想郷であってほしいですね。



伸さんのご近所レポート!! Part 2



スズメバチバトルを見ました。

10月はじめころの昼前のことです。三崎口駅下の駐車場のフェンスにたくさんのヤブカラシが絡まって花を咲かせていました。

花に群がっているのはたくさんスズメバチです。

小さな花に大きなスズメバチが顔を突っ込んでいるのは、蜜をもとめることでしょうか、盛りをすぎた花を不器用なあしどりでよたよたあるきまわっています。ときどき足を踏み外して下に落ちる姿はなんだか見ていると滑稽でした。落穂ひろいをしているように見えたのです。

さて、そんな姿を横目でみながら歩いていくと足元でぶんぶん音がします。ドキッとして立ち止まりしゃがんでみると、なんとキイロスズメバチとオオスズメバチが組み合ってレスリングをしています。お互いにしっかり向き合っていてあしを絡んで転げまわっているのです。腹さきでつつき合っているのは針で攻撃しているのでしょうか。しばらく見ていると小さいほうのキイロスズメバチがよたよたと離れました。そして少しすると飛び去っていきました。オオスズメバチは横になったままあしをもがいています。

ときどきスズメバチの死骸が道端に落ちているのを見ますが、こんなバトルでやられたものもいるんですね。

(伸) 2013/11/11

カニグッズ(8)

今回は富山県高岡市にお住まいの会員の盛野さんが会に寄せてくださったカニグッズを紹介します。盛野さんは2006年、NHKのTV番組「ダーウンが来た！」で小網代のアカテガニのことを知り、2007年、会に「資料を」と電話を下された前代表の仲澤さんが話してくれました。その夏、千葉県にお住まいの娘さん一家とカニパトに参加されました。ライフワークでされているパッチワークでアカテガニのタペストリーを作成するのに、どうしてもアカテガニの放仔の現場に立ち会いたいという熱心な思いからだそうです。

2007年9月15日発行小網代つうしんNO、100にはその感動を綴った手紙と赤いカニの貼り絵のついた絵手紙が2通掲載されています。

会にはその後、出来上がったタペストリーの写真が届き、スタッフ一同、大きな作品だろうと感心して拝見しました。2009年6月14日の小網代つうしんNO、108に「I LOVE 小網代の森 夏の大潮の日暮れどきカニの群れが森から海へ集まり波打ち際で幼生を放つ。この小さな命を育む営みは森を守る会の人々に支えられていた。この感動を留めたい。」とパッチワークキルト展の案内に盛野さんが記した言葉と写真が掲載されています。

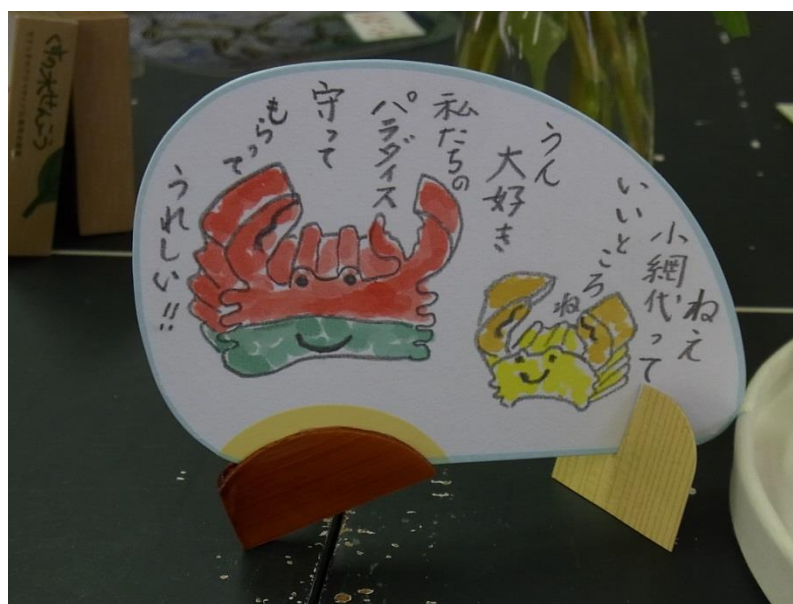
その後、資料のお礼にと青い海色に赤いアカテガニの入ったクッションが送られてきました。写真はその一部分です。パンヤを抜いてカニグッズのコンテナに収納してあります。



またまた、その後、今度はエンジ色の和服の布と針金を使った4cmくらいのアカテガニがたくさん送られてきました。ざわざわと岩を這い海に仔を放つ様子が再現できるくらいの数のかにはです。簡素にデフォルメされたカニたちが面白い作品です。(写真が上手に撮れてなくて済みません。)



そして、昨年の総会の時、いつもカニグッズを会場に並べるのですが、仲澤さんが、その中に「これ」って飾ってくださったのが、3枚目のカニの絵のはいった団扇です。



形が面白いので、みんなの目を引きました。木製のカニの親子が可愛いと仲澤さんが盛野さんに送ったお礼状のようです。何をかくそう盛野さんは絵手紙の名人でもあるのです。

以上、盛野さんのお許しを頂いて、紹介させていただきましたが、アカテガニのご縁で三浦市と高岡市を行き来するつながりができたこと、嬉しいですね。

カニグッズ保管者 宮本美織

雨と風のあとに

中井 由実

26号27号28号と

立て続けにきた強い台風

その合間の一日

森を任された仲間たちが作業に入った

川からあふれた水がつくった泥の跡

もぎ取られ 絡み合い流された枝

皆で それに沿って歩く

強風にあおられ倒れてしまった斜面の木

皆で 谷間に還す

これからも

どんな台風がきたとしても

海へと続く水の流れ、風の流れを絶やさないと

この森と干潟に出会った時に

私たちが約束したことだから

これからもずっと

ずっと一緒にいくからねと



台風

中井 由実

おさえきれない

怒り

哀しみ

やりきれなさを

天がぶちまけたような大嵐

人は訳が判らず

ただ、右へ左へ、あるいは伏して

通り過ぎるのを待っていた

小網代の森はその理由を知っていたのだろう

そよそよと伸びる木を倒されても

緑光る広場を流されても

何もいわずに

許していたのだから

◆神奈川のツキノワグマ 2013.10.13

晩秋の頃になると、神奈川県内の丹沢山地ではツキノワグマの相次ぐ出没情報がしきりに報道されるようになる。理由として山と集落を隔てる里山の荒廃と食糧不足があげられる。農家のカキや畑作物が食べ荒らされた、またクマと鉢合わせをしたという例もある。ある山の小学校では、集団登下校を実施し全生徒には鈴を持たせるようにしたという。

登山口ではクマ注意の看板を幾つも見ている。また、小田急本厚木駅構内の厚木市観光協会ではクマ除けの鈴を販売していた。

丹沢山地に生息するクマの数は、神奈川県では約3～40頭と推定している。この数は30年前から少しも変わっていない。種としての保存限界を遥かに下回る低い数である。山里へ姿を現すのは、冬眠を控え体力をつけるため、クマの生息地である山奥の食べ物不足が主な原因である。

ブナの実やドングリなど木の実のなる広葉樹林が減って、戦後に大規模な植林を盛んに進め木材として使うスギやヒノキ、サワラ等の針葉樹の人工林が増えたことといわれる。

他の要因には丹沢ではニホンジカが増えたため、下生えの草地が食べ荒らされシカの嫌いなミツマタやアシビ、マルバダケブキ、バイケソウ等が各山域で大繁茂するようになった。クマの大好物であるブナの実が生らない立ち枯れ等の遠因ともいわれている。



神奈川県で集計したツキノワグマ捕獲の記録がある。

昭和59年(1984)	10頭	平成元年(1989)	2頭
60年(1985)	7頭	2年(1990)	2頭
61年(1986)	6頭	3年(1991)	14頭
62年(1987)	2頭	4年(1992)	0頭
63年(1988)	2頭		

平成4年から0頭が続いているのは、この年からクマの狩猟を全面的に自粛しているからである。なぜ平成3年が多いのかというと、来年からクマ狩りができなくなるというのでソレとばかり大規模な狩猟した結果である。この時になぜ思いやりのある保護対策ができなかったのか、哀れ可愛そうなクマたちである。最近の例では2010年、人里へ現れて仕留められた捕獲記録は7頭と確認されている。また全国的には、出没確認は1000件余を数えている。

県民の巨大な貯水池として誕生した丹沢湖や宮ヶ瀬湖の存在も、野生動物たちの活動生息範囲を狭めている。ある年の深夜、宮ヶ瀬ダム湖の周辺県道でメスのツキノワグマが交通事故に遭遇し車が破損した。発見当時はムシの息であったが、翌朝には事切れていたという。実に悲しい出来事である。

ある山里では、サル用のカゴ罠にツキノワグマが捕獲されたことがある。ヒト前に姿を現せば恐ろしいものだと、辛いトウガラシスプレーや爆竹でたっぷり学習させてから遠く離れた丹沢山地の山奥へ放してやったという。こころ優しい人たちである。

初冬の12月から翌3月迄の約4ヶ月がクマの冬眠期間といわれている。その間は、飲まず食わずに静かに穴籠りしているという。メスの場合はこの冬眠中に出産育児をする。それも平均的にはメスとオスの2頭が誕生する。だから冬眠明けのメスグマと云ったら、ガリガリに痩せてまずは食べ物を漁りに歩き回る。この時に仔連れのクマと出会うのは非常に危険といわれる。

丹沢のクマにとって最悪なのは、首都圏に近く大勢のハイカーや登山者が多く押し寄せることである。また、標高1000メートル圏内が冬眠中のクマの山域といわれる。ところが、厳冬期の冬山登山を楽しむ人たちも数多く入山するので冬眠中のクマも落ち着かない。上信越や東北地方では、人を寄せ付けない深い積雪が冬眠中のクマたちの安全な生活圏を守っている。

独立した丹沢山地では幹線道路等によって隔離され、他山域との交流もなく、孤立化して遺伝子の多様性が必要であるといわれている。四国や九州でもクマが絶滅寸前に追いやられていると話題になっている。真剣になってヒトとクマとの共生を願いどうしたらよいのか皆で考えてほしい。

横浜市立野毛山動物園で飼育されているペアーのツキノワグマ、15年前から秋田県のクマ牧場から移ってきたものといわれる。

戦後の昭和時代に高知県四万十川で生息記録から消えたニホンカワウソや、明治時代中期に奈良県大台ヶ原山で最後に捕獲されて全滅したというニホンオオカミの二の舞とならぬよう、なんとしても彼らの生活圏である丹沢山地の自然を保護すべきである。

三浦半島最後のキツネは昭和50年代に大楠山で捕獲されている。小網代の森に生息するタヌキ、イタチ、ノウサギ達も、平成の世になってから絶滅したといわれぬように大事に守ってやりたいものである。

祖父川精治

いちご川だより

◆ヨセミテの火事

ヨセミテ国立公園は、目と鼻の先にあります。

この夏大きな火事がありました。

大学付属の植物園の人が、教えてくれました。

「保全保全、って言って、一生懸命、手をつけず、そのままの状態であるようにって、やっていたのよ。でも、どうやら、それがよくなかったみたい。森の中がどんどん混み合ってきたら、乾燥しているカリフォルニアの気候では、ちょっとしたことで、火事になってしまう。昔は、こんなことはなかったのよ。先住アメリカ人(インディアン)たちは、ヨセミテの森を利用していただけだから。森が混み混みじゃなかったのよ。今じゃ、火事になったら、それこそ、本当に手がつけられなくなって、あつという間もないまま、広がっちゃって。これじゃ、何のために保全したんだか。だからね、手を加えるっていうか、人間がほどよく自然を利用したり、そのお世話をするこつって、大事なんだと思う。インディアンの人たちは、森をわざと燃やしたりもしてたみたい。私たちも、自然のお世話と利用することが大事って、やっとわかってきました。でも、まだ、お世話の仕方がよくわかってないのよね。」

今は、お世話の仕方を研究しようって、がんばっている
そうです。

僕も、日本の森で、お世話のボランティアをしていた、と言ったら、どや顔で、「ほら、やっぱり、お手入れが必要なのよねえ」と言っていました。



小網代で、さんざん遊び(学び?)、この秋から、カリフォルニア大学バークレイ校に進学しました。大学に浦の川のような川が流れています。いちご川という川です。浦の川育ちから見たいちご川のことなど、また、連絡します。

ジポーリン周樞

小網代の森と干潟を守る会の活動

- 9/16 小網代 森と干潟つうしん No.130 印刷・発送
(於 横須賀市 市民活動サポートセンター)
- 9/16 スタッフ会議
- 10/12 第 117 回自然観察&クリーン「カワウと公害」
- 10/28 まるごと博物館会議 16:30
- 11/16 通信印刷。スタッフ会議

今後の自然観察&クリーン テーマと日程

- 10/12 干潟の鳥「カワウと公害」 講師:別府史朗氏 終了しました
- 12/7 冬の植物 講師:鈴木清市氏
- 2/15 海藻の観察会 講師:小倉雅實氏
- 4/29 春の植物 講師:矢部和弘氏
- 6/未定 干潟のカニ 講師:小倉雅實氏
- 7/未定 森オープン記念イベント
- 8/未定 アカテガニ放仔観察会 NPO 法人小網代野外活動調整会議

ご寄付ありがとうございます

会の活動費 祖父川精治様 橋美千代様

森の応援金 石川登美子様 野内真理子様のご遺族様 別府史朗様 小倉雅實様

以上の方からご寄付をいただきました、ありがとうございました



森の応援金 かながわトラストみどり財団より感謝状をいただきました

先にお知らせしましたとおり、皆様からお預かりした森の応援金 30 万円を 8 月 27 日、「小網代の森緑地保全のため」として かながわトラストみどり財団に寄付しました。寄付に対し、お礼状をいただきましたのでご報告します。



新入会員募集のお知らせ

小網代の森と干潟を守る会への入会を希望される方は、下記の口座に年間会費をお振込みください。その際、通信欄に「入会希望」とお書き下さい。入会金は不要です。

年間会費(2013年7月～2014年6月)は、通常の会員は1,000円、賛助会員は5,000円で、いずれも振替料金のご負担をお願いしております。

口座：郵便振替(00の払込取扱票) 00260-4-21569 小網代の森と干潟を守る会

* 小網代の森と干潟を守る会への入会は随時受け付けておりますが、会員年度は7月から翌年の6月末までとなります。中途入会の方には会報「小網代 森と干潟つうしん」のバックナンバーをお送りします。またメールアドレスをお書きいただいた方には会員専用ページのIDとパスワードをお知らせします。

第 118 回自然観察 & クリーンのお知らせ

主催：小網代の森と干潟を守る会 共催：NPO 法人小網代野外活動調整会議

◆ 冬の植物

繰り返す台風の襲来で森の木々も潮を浴びてしまいました。赤・黄・緑に彩られた美しい紅葉も今年は期待薄。けれど赤い実、青い実、いろんな種類のどんぐりも、山のような、絵手紙づくりの素材たちが訪れる人たちを歓迎してくれます。小網代の森は晩秋、落ち葉に台風の爪痕を残しながらもしたたかに生き抜いた森の植物たちに元気をもらいに行きませんか？

日 時：12月7日（土） *小雨決行
集 合：AM10時 三崎口駅改札前
解 散：14:00 ころ現地解散
講 師：鈴木清市氏
持 ち 物：長靴、お弁当、飲み物、雨具、あれば（双眼鏡、図鑑
など）、小さなお子さまは着替えもあると安心です
*暖かい服装でご参加ください
申 込：当日現地で受付します
費 用：無料
お問合せ：046-889-0067（仲澤）



NPO 法人小網代野外活動調整会議からのお知らせとお願い

小網代の森と干潟を守る会はNPO 法人小網代野外活動調整会議の活動を支援しています。

■ トラスト緑地保全支援会員 & 小網代応援団募集

◆トラスト緑地保全支援会員になるには

トラスト財団のパンフレットにある申込書に記入して郵送します。またはトラスト財団のホームページ (<http://ktm.or.jp>) から、申し込むことができます。支援したい緑地にはぜひ「小網代の森」をお選びください。通常のトラスト会費(大人 2000 円、中高生 1000 円、小学生 500 円、家族会員 3000 円)の他に 3000 円の支援会員会費が必要です。小網代の森をよろしくお願ひします。

◆小網代応援団に入るには

NPO 法人小網代野外活動調整会議(電話:045-540-8320 E-mail: koajiro@koajiro.org)までお問い合わせください。

「小網代応援団」に登録していただいた方には、年に数回の特別観察会をご案内いたします。森と干潟の様子をしっかりと見守り、楽しみながら、大好きな森を育てていきましょう。

小網代 森と干潟つうしん NO.131 2013年11月16日発行

森も海も干潟も 奇跡の集水域生態系を未来の子どもたちへ

小網代の森と干潟を守る会

〒238-0111 神奈川県三浦市初声町下宮田 261-5

代表 高橋 伸和 E-mail: info@koajiro-higata.com

電話 046-889-0067(副代表 仲澤)

URL: <http://www.koajiro-higata.com>

年会費: 一般会員¥1000 賛助会員¥5000(7月~6月 入会金不要)

郵便振替 口座 00260-4-21569 加入者名 小網代の森と干潟を守る会

* 既に退会のご連絡をいただいた方にも年度末(6月末)までお届けしております